神（アッラー）の名を唱えて生きるムスリムたち

おやさと研究所講師
澤井　真　*Makoto Sawai*

タクシー運転手との駆け引き

エジプトの首都カイロでは、タクシーはバスと同じく市民の足として手軽な交通手段である。タクシーは、俗に白タク（白いタクシー）と黒タク（黒いタクシー）に分類されている。白いタクシーには、デジタル・メーターが設置されているが、黒いタクシーには付いていない。運転手と料金をめぐる長い長い金額交渉を避けるには、白いタクシーを使用するのが一番だが（メーターが改造されていることもしばしばだが）、黒いタクシーしか捕まらないときもある。

神の名を唱えながらエンジンをかける運転手

タクシー運転手アフマドさん

留学して間もないある日、路上に車を止まっていた黒タクに乗り込んだ。メーターの付いていない黒タクは、白タクに比べて旧式であるため、外装も内装も年季が入っている。エンジンをかける際に、運転手は、「ビスミ・ッラー」（神（アッラー）の御名において）と唱えていた。筆者は当初、運転手がこのように唱えた理由を、年季が入ってエンジンもかかりにくくなったからだと考えていた。しかし、その後、真新しい白タクの運転手がエンジンをかける際に、「ビスミ・ッラー」と唱えているのを目にした。そこでようやく、「車のエンジンがかかりますように」、と願って唱えているわけではないことを知った。

この「ビスミ・ッラー」とは、イスラームの聖典クルアーンのほとんど全ての章の冒頭で唱えられる文言、つまり「慈愛あまねき慈悲深き神（アッラー）の御名において」（ビスミ・ッラーヒ・ッラフマーニ・ッラヒーム）の最初の部分である。[1] この文言は、礼拝のたびに繰り返し唱えられており、非常に重要なクルアーンの一節である。ムスリムたちは、神の言葉であるクルアーンを日常生活で繰り返し唱えながら生活している。

街の至るところにあふれる神の名

このことに気づいてから、筆者は、日常生活の各場面で、「アッラー」の名前を目にしたり耳にしたりするようになった。正確には、今まで気に留めていなかったことに注意を払うようになった。例えば、「ビスミ・ッラー」と唱えてからお茶をすすったり、吉報に「マーシャー・アッラー」（それは神がお望みになること）と口にしたりといった具合である。

特に、「ビスミ・ッラー」の文言は、食事など何かを始めるときに用いられることが多い。そのため、ムスリムの先生が授業を始める際やスピーチを始める前に、神に対する祈願文としてこうした文言を唱えるのである。

その後、アフマドさんという年配のタクシー運転手と仲良くなり、空港などへ向かうときにお世話になったが、その道中でいろんな質問をするようになった。彼はタクシーのダッシュボードにクルアーンを載せており、ミラーには「スブハ」と呼ばれる数珠をかけていた。この数珠は、「神は99の名前をもつ」というハディース（預言者ムハンマドの言行録）にちなんで、神の名前を唱える際に用いるもので、99ないしは33個の珠で作製されている。33個の珠を用いるときには、3周することで99の名前を数える。時折、タクシーのなかでクルアーンを流すなど、彼の信仰心が「イスラーム・グッズ」を通してよく伝わってきた。もちろんタクシーの車内事情は千差万別である。なかには、派手な車内とは裏腹に敬虔なムスリムであることをアピールするタクシーもある。その一方で、十字架やマリアの絵画を載せることで、キリスト（コプト）教徒であることを示したタクシー運転手もいるように、車内は多種多様である。

ミラーにかけられたスブハ（数珠）

「アッラー」（Allāh）というアラビア語は、必ずしもイスラームの神を指す語ではない。「アッラー」とは、神一般を指す「イラーフ」（ilāh）と、定冠詞の「アル」（al）から成る言葉であるため、「（唯一なる）神」という意味になる。アラビア語を母語とするユダヤ教徒やキリスト教徒にとってみれば、彼らの信仰する唯一なる神は「アッラー」である。一方、イスラームにとってみれば、イスラームの神はユダヤ教とキリスト教の神と同じであり、彼らがアッラーと呼び表すことには何ら差し支えない。しかし、日本語の話者である我々が、「イスラームでは神のことをアッラーと呼んでいる」と理解してしまうと、アラビア語の「アッラー」のイメージを捉え損ねてしまうのである。

街角にあふれる神の名

筆者が確認したかぎりでは、「アッラー」という言葉は、駅のホームや玄関など人目につくあらゆるところに掲げられている。なかには、ビルの最上階に付けられているものもあった。当初はその理由が判然としなかったが、何度か通るたびに気がついた。そのビルの屋上には大きな広告が設置されており、その看板を目にしたついでに、「ウズクル・ゥッラー」（神を想い念じ、その御名を唱えよ）という文言も人々の目に入る。

大きな看板の下に付けられた
「ウズクル・ッラー」の看板

ある日のこと、「駅までいくら？」と筆者が尋ねると、「20ポンド」と相場の倍の金額を提示する運転手がいた。「10ポンドで十分でしょ」と答えても、一筋縄ではいかない。金額も決まっていざエンジンをかけようとするが、タクシーのエンジンはかからない。そういえば、「ビスミ・ッラー」は言っていなかったような。

［註］

（1）クルアーンの「タウバ章」（第9章　ṣūrat al-tawbah）の冒頭のみ、例外的に「ビスミ・ッラー」の文言は用いられていない。